

再び、「中川らしさ」とは…。

「当たり前」がバランスよくそろった「普通の暮らし」の豊かさ

地域づくりは新しいものをつくることばかりではなく、村の人や資源を有機的につなぐ取り組みです。つながることで新しい価値や相乗効果が生まれ、可能性が広がります。また、地域のさまざまなものが密接につながり合った社会では、二面が突出することなく、生活環境はいつもバランスが取れ調和が保たれます。

村のもつ伝統文化の魅力は、農業・農村にふれる機会をとおし外へと発信され広がっていきます。地産地消は子どもたちへ食育の機会を提供します。農業は交流を基軸にいた形がみられるようになりました。さらに工業や商業とつながることによって生産・加工・流通までが一貫した、農業の本質ともいえる総合力の発揮も期待できます。

村内には地域にしっかり根を張った企業も存在します。このような企業の活動が、住民が豊かに暮らせる経済環境をつくっていきます。地域の経済主体や関係機関が連携し、産業の地域内循環や新産業創出に向けて横断的な仕組みをつくっていくことも今後は必要です。

さて、「中川らしさ」を考えてみましょう。よく中川村には「これだ」がないという声を耳にします。確かにひと言で村を表現するものはありません。しかし少し発想を変えれば、突出したものがないというのは、「何でも（なんとか）できる」ということではないでしょうか。「それに合わせる・頼る」ではなく、「自分たちでつくる・工夫する」楽しさがあります。

「当たり前」がバランスよくそろった、平凡だからこそ味わえる「普通の暮らし」の豊かさが中川村にはあります。果物はりんごのほか桃、梨、ぶどう、いちご、干柿、その他いろいろあり、野菜はどれもくつきりとした味わいでおいしいし、また、春の山菜、秋のキノコなど、季節を問わず、四季折々にいつもなにかおいしいものがある、四季折々に訪れる価値がある、というのが中川村の魅力です。

中央アルプスと陣馬形山の間に天竜川が流れ、その雄大な景観の中に人々の暮らしが溶け込む懐かしくも心安らぐ風景。残雪と花と新緑の春、入道雲の下で木々の緑が揺れる夏、稲が黄金色に色づき、澄み切った青空から唐松が落葉し、果物が次々と色づく秋、雪降りの後朝日を浴びて村全体が真っ白に輝く冬の朝。

村民についても、多くの農家が自分の農業にこだわりをもち、自分の考え、自分のやり方でおいしい作物づくりに取り組んでいます。農作物や山の幸の料理自慢も大勢いるし、さまざまな工芸作家の方もいます。文化展には、書道、絵画、花、手工芸、写真、たくさんすばらしい作品が並び、ステージでは、音楽や踊りが次々と演じられる。地質学や文学、民話の研究者もいる。蜂博士がいて、凄腕のハンターがいて、長野県チャンピオンの囲碁の打ち手もいる。どんちゃん祭りはあるだけの盛り上がりを見せ、バレー祭では強烈なスパイクが飛び交い、さまざまなスポーツも盛んです。人口わずか5千数百の村だとは思えない、元気で活発な活動があり、ユニークな人が大勢います。

目玉ひとつだけが有名で、その時期だけに観光客が集まるというよりも、例えていえば丹精こめたちうし寿司のように、いろいろな具材がそれぞれの持ち味を出し合い混ざり合って深い味わいがあるような村を、中川村はめざすべきだと思います。

たくさん魅力があふれる中で、「一番の村の魅力はやはり人です。自分の生き方に自信をもち、楽しみながら自分のことだわりに打ち込んでいる姿が何よりも魅力だと思います。村民の元気にふれてもらい、村外の人たちにも元気になってもらいたい。そういう交流の場で、村民も村外者も両方がHAPPYで長続きする関係ができてくるのが理想だと思います。

村発足50周年の今年10月、中川村は「日本で最も美しい村」連合へ加入しました。中川村の美しさは、先人が長きにわたって、自然とのやりとりを重ねて形成してきた農村美です。息を飲むような大自然の光景と異なり、繊細で人の身の丈にあった温かさがあります。平凡だけど見ていて飽きることがありません。これもまた「中川らしさ」ではないでしょうか。